

登山紀行

伏美岳・富良野岳・黒岳・北鎮岳・西ヌプカ

伏美岳登山

平成二十一年六月二十一日（日）、今年の山開きを兼ねた伏美岳登山に参加した。芽室山の会へ入会している中学の同級生と同窓会で一緒になり、昨年からの登山を始めたことを話したところ入会を勧めてくれたので、入会させてもらった。

昨年からの登山はほとんど単独行であったが、やはり常に事故の心配はあった。そのため、無理なく月一回ほどの集団登山に参加させてもらい経験を積むことができる状況は、これからの山行への大きなステップとなると思ったのである。その山の会のホームページである伏美岳の山開きが企画されたので、早速参加することにしたのである。

十勝地方は、五月下旬より、天候が不順で、雨・霧・低温が続いており、前日の天気予報も雨で、心配していたが、山の会の今回のリーダーに電話すると、

「多少の雨も通常の登山にはつきもので、その経験を積むことも必要ですよ。」

とのこと。当日はやはり曇り空で今にも降り出しそう。

それでも集合場所の芽室公民館前には、三々五々参加者が集まってくる。受付を済ませ、参加予定三十二名ほどが、五、六台のリーダーの車に分乗して出発。上美生市街から伏美仙峽を目指す。途中案内看板に従って、トムラウシ林道に入り、伏美岳避難小屋を通過してさらに林道を登って行くと、三、四十台は駐車出来る広々とした登山口駐車場に到着した。

登山口に近づくほどに明るくなり、一部日が差すほど。リーダーの話によれば、雲の上に出るとたぶん山頂は晴れているとのこと。やはり経験がそう言わせるのだろう。

気温も上がってきて、ヤツケは不要とのことだった。スパッツをつけるのも初めてで、要領を得ない。そこは山の会のメンバーである。四苦八苦している私を見て、装着方法を教えてくれる。

準備運動を全員で行い午前八時五分に登山開始。我々は第一班で、先頭を今回の山行のリーダー、

私、女性二人、サブリーダーの順で登山開始となる。

登山道は山の会の有志が、先週雨の中で笹刈りをしたというところで、歩きやすい。またこのころの雨で、もう少しぬかるんでいるかと思ったが、道は乾燥に近くほんとに歩きやすい。

中腹の一二四米でほとんど平坦な尾根に出る。その後高度を上げるに従い急登攀となってくる。七合目の看板を過ぎるころから、さらに急坂となる。気温も上がり、汗が噴き出し、ベテランは半そで姿である。しかし、集団登山のため、休憩を頻繁にとってくれるので、時間はかかるもののそれほどきつくは感じない。

昨年、単独登山のときは、ほとんど休憩らしい休憩も取らず、結構きつい登山を経験していたので、初めて登山のペース配分が体験できたように思う。単独登山ではこのような経験が積めないのである。初心者にはありがたいペースである。

途中妙敷山（おしきやま）が結構高い位置に見える、右にはトムラウシ山がほぼ同レベルに見える。妙敷山は一七三一米、トムラウシ山は一四七六米（大雪山系のトムラウシ山ではない）、伏美岳は一七九二米である。妙敷山が上に見える間は、

まだ頂上は遠い。

九合目に到達するとさすがに妙敷山が眼下に見えるようになり、それからは視界が広がり、日高山系の一部も見えるようになる。

頂上直下には雪渓がありこれを超えるとハイ松の群落。これを潜り抜けると頂上が突然のように現れる。そして三百六十度さえぎる物のない大パノラマが待っていた。リーダーが登山前に判断したように、途中からは陽が差し、暑い登山となったが、この残雪をたたえた日高山脈の素晴らしさは誠に美しく見とれるばかりであった。

通常このような見晴らしの利く登山はめったにないとのこと。ふつうは霧か風のため頂上を極めた後は早々に下山開始となることが多いという。しかし今日は、たっぷり一時間を山頂で過ごすことになった。

頂上到着十一時二十分。休憩を含めて三時間十五分の登攀であった。通常、十勝側からは伏美岳の南の日高山系は、その山容すら見ることはできないが、この伏美岳からは北戸蔦別岳と戸蔦別岳が正面に迫り、その中間になだらかなBカールとAカールが横たわって残雪を湛えている。

左に眼を転じると妙敷山が眼下に見え、その奥には十勝幌尻岳、更に幌尻岳の急峻な山容が屏風のように立ちふさがっている。いずれも残雪を湛え、まぶしく輝いて見える。

右側へ転ずると、こちらにはビバイ口岳、ヌカピラ岳がその尾根を接続して続いている。伏美岳からビバイ口岳に至る尾根続きには縦走の登山道が見えている。見あきぬ頂上の景観を堪能して、十二時二十五分下山開始。登山口十四時四十分着。休憩含めて二時間十五分の下山時間であった。今年初めての登山は大満足で無事終了した。

富良野岳登山

七月五日午前六時。山の会の集合場所である芽室町公民館前に集合する。今日は、十勝連峰の一番南に位置する富良野岳登山である。冬になると空気が乾燥して、自宅からいつも見える山である。参加数は四十二名。バスで十勝岳温泉登山口へ。十勝岳温泉の駐車場はほぼ満車状態で、途中の道路には多くのマイカーが駐車していて道幅は狭く今更ながら登山ブームを実感する。かく言う私も昨年からの新米ハイカーではあるが・・・。

ちょうど山開きの時期と重なったため、多くの登山者が殺到しているようである。バスから降りて荷物を受取り、準備をする。

八時四十五分登山開始。登山口は、十勝岳安政火口への遊歩道から始まる。約三十分ほどで、安政火口手前のヌツカクシ富良野川を渡る。いたるところに富良野岳、三峰山への案内矢印が、大岩に大書されており、道をあやまることはない。

D尾根へと向かう長いトラバースが始まる。D尾根に出るまでは、富良野岳の山容は晴れていても見えず、尾根に出るとすぐにも山頂が見えるように思えるが、尾根に出ても三峰山の山裾を迂回し、富良野岳肩分岐にでるまではその山容すら見えない。

今日は、霧がかかり、雲も湧きあまり良い天気ではなかった。尚更見えない。三峰山の山裾を迂回して本格的な長いトラバースが続く。山道は比較的歩きやすく、急峻な登りには、角材による階段が設置されていて比較的登りやすい。

途中の幾筋もの沢には雪渓が残り、ヒンヤリとして気持ちが良い。

D尾根をしばらく進むと上ホロ分岐へ上富良野岳・上ホロカメツトク山への分岐へ出る。上ホロ分岐から約一時間三十分ほどでようやく富良野岳肩分岐へ出る。

途中登山道が三峰山の中腹をうねって登る登山道が見通せる。この日は多くの登山客が列をなして進む様子が見えた。

肩分岐からは、樹木もなくなり大岩と高山植物の間を縫うように山頂へと続く登山道を行く。

この日は肩分岐で時々霧が吹きつけ、気温も下がってきたのでヤツケをはおる。高山植物の写真を沢山撮りたいと考えていたが、登山道は急斜面に作られ、狭いのと時々大岩が道をふさぐので、踏み外すと滑落して谷底まで落ちてしまう。そのため登りに集中する。

高山植物はエゾノハクサンいちげ・エゾコザクラ・ミヤマ金盃・ウコンウツギ・イワブクロ・ハクサンチドリ・イワカガミ・ガンコウラン・チングルマなど数えきれないほどの花が咲き、花の山と呼ばれる所以を感じる。特にハクサンイチゲの大群落は山裾を覆うほどに咲き乱れていた。

山頂の手前でハイ松の群落がありここを出ると

山頂である。十一時十五分山頂到着。休憩も含めておよそ三時間三十分であった。

十二時二十分まで山頂で休憩したが、時々霧がきれるものの、十勝岳方面は全く視界が利かない状態。わずかに前富良野岳方面が雲の合間に見える程度で、先日の伏美岳のような素晴らしい景観には出会えなかった。

十勝岳連峰はこれからも何度か登山する機会があると思うので、次回への楽しみとする。

下山は十二時二十分。登山口へは十四時五十分。休憩を含めて約二時間三十分であった。

黒岳・北鎮岳

今回の大雪登山は、八月二十三日に大雪扇沼山登山として計画されていたが、この日、天気予報が雨であったのと、七月には、トムラウシでの遭難事故もあって、登山者にとっては安全についてかなり神経質になっていた事も、延期の理由であった。また、山も扇沼山から黒岳・北鎮岳を縦走して愛山溪へ下りる長丁場に変更された。

この縦走は、初心者にとっては若干きつい計画

であつたので、山の会は芽室からバスで層雲峡へ向かうが、自分は鹿追から層雲峡へ自家用車で参加し、黒岳から雲の平を経て、北鎮岳（北海道第二の高峰）まで山の会と同行し、その後折り返して層雲峡へ単独で下りることとした。

五時三十分には層雲峡黒岳ロープウエイ山麓駅に到着したが、本隊は、バスのため、到着は六時二十分を過ぎていた。

黒岳五合目駅から、三分ほど歩いて七合目まで歩いてリフトに乗る。層雲峡から、ロープウエイ、リフトを利用しないで七合目まで到達するのに約三時間はかかるが、ロープウエイリフトで三十分ほどで七合目に達する。

七時過ぎに七合目を出発し、一路黒岳頂上を目指す。相当に高度があがっている。登山道は急でぐんぐん高度を増していく。空模様はあまり良くなく、霧もかかっていたが、高度を上げるに従って、少し晴れる気配である。

七合目から一時間ほどで、黒岳山頂に立つ。見渡せる雲の平から黒岳石室にかけて、ナナカマドやつつじの紅葉が目に見え鮮やかに飛び込んでくる。

大雪は九月になるとすでに秋なのである。ベテ

ランによれば、まだ一週間早かつたとのこと。最も紅葉が美しい期間は短く、天候も影響するので何度も足を運んで初めて最高の紅葉に出会えるものようである。

縦走の行程はまだ先は長く、山頂での休憩もそこそこに次の黒岳石室を目指す。ここは下りということもあって、ほんの十分ほどで、石室に到着する。ここで有料のトイレを利用し次の行程へ進む。

石室の背後には、文学者大町桂月にちなむ桂月岳や、なだらかな凌雲岳が山裾に紅葉の色模様を配して美しく、更に奥には目指す北鎮岳が、万年雪の雪渓をまとって構えている。

かつて七合目まで、観光で訪問したことはあるが、黒岳の上に、こんな風景があつたのである。

広々として、平坦な登山道がお鉢平の周辺の稜線に向かつて伸びている。雲の平の登山道脇には、ナナカマドやウラシマつつじの紅葉、チングルマの綿毛の白、ハイ松の緑が織りなす見事な色彩があふれ、心地よいトレッキングができる。

登山とは違って、このトレッキングもまた魅力にあふれる行程である。一時間ほどの心地よいト

レッキングの後、大雪噴火口を見渡せるお鉢平展望台（二千二十米）に到達する。

ここからは、間宮岳（二千百八十五米）、中岳（二千百十三米）、北海岳（二千百四十九米）、松田岳（二千百三十六米）の二千米級の山々が、噴火口を取り囲むようにそびえ、その背後には旭岳の雄姿が見える。

振り返って、黒岳方向には、印象的な烏帽子岳や、白雲岳が見渡せる素晴らしい景観である。

背後にはこれから登る北海道第二の高峰、北鎮岳（二千二百四十四米）が雪溪を這わせて控えている。

休憩五分ほどで、先へ進む。雪溪を登山道脇に見ながら、三十分ほどで、北鎮分岐へ到達する。ここから尾根沿いに左へ回り込むと、中岳から旭岳へお鉢平をめぐるコースへと続くが、我々は、あと百米足らずの北鎮岳頂上へと向かう。北鎮分岐からは三十分ほどの登りで頂上へ到達した。十時二十五分であった。七合目から約三時間二十分程の行程であった。

山頂は時々霧が流れ、視界を遮り、風も強い。本隊はこれから更に縦走を続け、愛山溪へと向か

うが、自分はここから引き返して黒岳・層雲峡へと戻るので、ここで別れることになる。本隊の昼食は、もう少し下って、比布岳付近でとるとのこととで、休憩もそこそこに出発していった。

しばらく頂上で霧の晴れるのを待っていると、十分ほどで、霧が晴れ、大雪の山々を堪能した。北鎮岳頂上に登って初めて、北西方向の比布岳や急峻な愛別岳・鋸岳・安足間（アンタロマ）などを見ることが出来る。しばらくすると、鋸岳の腹の登山道を下っていく本隊が見え、写真も十分に撮れたので、下山することにした。十時四十五分であった。

帰途は単独行なので、怪我をせぬように細心の注意を払いながらの下山である。北鎮分岐からは、なだらかな下りなので、順調に歩が進む。途中で、ホシガラスがハイ松の実を啜えていくのが見えたり、真っ赤に色づいたナナカマドを撮影したり、ゆっくりと下山した。一時間二十分ほどで黒岳山頂へ戻る。

ここで昼食。正面に桂月岳、凌雲岳の紅葉を眺めながらの昼食は、登山の楽しさを倍加してくれる。遠くに北鎮岳やお鉢平・雲の平・石室などが

見渡せ、達成感と感動を覚える瞬間である。十二時二十五分に黒岳から下山。約一時間で七合目へ到着した。

あとは、リフト、ロープウエーを乗り継いで、十三時三十分には、無事層雲峡へ下る事が出来た。初めての表大雪登山は、多くの経験と素晴らしき景観を与えてくれた。そして約七時間のトレッキング行程を達成した充実感で満たしてくれた。表大雪は、今後何度も訪問することになる予感を感じた一日であった。

西又プカウシヌプリ

西又プカの山は、自分のホームページのロゴ画像にも使用した身近な山である。自宅よりわずか二十kmほどにある。帯広など十勝中部からも北の方向に見える十勝の高原地域でもある。

実は昨年十一月六日に、一度西又プカを登った。登ったといっても、千二百五米標高点までで引き返した経緯がある。この日の数日前に雪が降り、その後晴れ間が続いたので大丈夫だろうと、気軽に登ったのである。しかし、山頂部分は、雪が融けず深い所は足首までもぐってしまいうほどで、も

ちろんアイゼンなどはなく、下山時の足元が滑る心配もあって、ここで引き返した。

今回は、晴天でもあり、思い立って十時に自宅を出発する。登山口の駐車帯には、一台の乗用車が停車しており先行者が居るようである。身支度をして十時二十五分に登山開始。ここは標高は高くはないがジグザグの登山道ではなく、ほとんど直線的に標高千二百五米まで続く。

登山道は比較的歩きやすいが何しろ平たん路がない。そのため結構脚にくる。それでも一時間ほどで、十一時二十分には千二百五米地点に到達する。途中は白樺の樹林帯が続くが、途中東又プカが右手に見えるようになると樹林帯が途切れ低灌木帯となって見晴らしもよい。ここから北の方向にさらに一段と高い頂上が見える。

一旦ゆるやかに下って五分ほどでコルに出る。突然大岩の大壁が立ちはだかる。岩の上に、先行登山者が一人休憩中。聞くと釧路から来て、昨日は糠平に止まって今朝登って来たという中年女性。のぼりがきつくて頂上はあきらめて休んでいるとのこと。ご主人が一人で頂上まで登っているので、ここで待っているのだという。

その壁の上部は再び樹林帯となるが、頂上も登山道も見えない。頼りになるのは上部にある標識テープのみ。テープを指して岩を登ること十分で岩れき帯を抜け登山道へ入る。途中、先行登山のご主人とすれ違う。

「然別湖が見えるけど、頂上の標識も何もないですよ」

とのこと。ここからはほんのひと踏ん張りで、千二百五十一米の頂上に到達した。十一時四十五分、一時間二十分の登りであった。

頂上からは、然別湖が眼下に見え右には東ヌブカと白雲山・天望山が見えるが、樹林帯の中でさほど見通しはきかない。頂上標識もなく、それらしい標識テープがあつて、大岩がある狭い頂上である。あまり天気が良くなく、湿気のせいもあつて、かすんだような風景で、写真もよく撮れないので二十分ほどで下山する。十二時十分であつた。下山を開始してすぐに登山道を見失つた。気付いた時には、樹林帯の中で踏み跡もなく、登り返して登山道を探したが見つからない。

登りの時も登山道が狭く、少し登山道を外れるとどこが踏み跡か見分けがつかないと思つていた

処だ。ここは登山ガイド本にも迷いやすいと書かれていたことを思い出した。

何回か登り返して探したが、ついに登山道も目印のテープも見つからない。しかし、方向は南へ下ればよいので、こんなところで磁石が役にたつた。方向を見ながら、十分ほど樹林帯を下ると、大岩の岩れき帯の上部に出た。しかし、標識テープは見えず、やむを得ず磁石で見当をつけて岩れき帯を降りる。途中で標識テープを見つけることが出来、登山道へ戻ることが出来た。

岩れき帯からほぼ五分ほど登り千二百五米の標高地点に到達する。十二時五十分であつた。西ヌブカは、この岩れき帯から上部で、迷いやすく、単独登山には注意すべき点である。特に下りのはきは、標識テープを確認しながらゆっくり下山すべきであつた。こんな経験もこれからの大きな教訓となつた登山であつた。